



ゆめ半島
千葉国体
2010

国体の記憶 ⑤

県代表として故郷のグラウンドに

このコーナーに登場してくれる人を募集します。
くわしくは広報課(☎20-15503)へ。



高木 晃さん(中台)

佐原市出身。高校3年時、ハンドボール東京都代表として和歌山国体(昭和46年)出場。昭和48年には千葉県代表(一般男子)として千葉国体に出場、センタープレイヤーとして活躍



「中学生のとき、校内スポーツ大会でハンドボールに夢中になりました。県代表選手だった担任の先生の指導の下、うちのクラスは見事に優勝。それが出発点です」

ハンドボールを本格的に始めた高校時代。東京の高校で毎日朝、昼、夕と練習に明け暮れ、まさに「ハンド一色」の生活を送った。

当時、学校のグラウンドは全日本選手も抱える東京教員チームの練習場にもなっていた。そこで目にしたのは国内トップクラスのレベル。「技術にとどまらず、たくさんのことを吸収できた」と振り返る通り、プレーに磨きがかかり、3年時には東京高校選抜の一員として国体をかけた関東大会に出場する。「くしくも会場が地元の佐原だったんです。そして対戦相手は千葉県。結果、優勝して国体出場を手に入れましたが、正直、後ろめたいような複雑な気持ちでしたね」

卒業後、東京電力千葉支店に勤務。しかし、オフアワーもあり「大学か実業団に入り、オリンピックを目指したい」と悩んでいた時期でもあった。会社に



マークを振り切りパスを出す高木選手(昭和48年)

はハンドボール部がなかったため、まずは地元チーム「佐原クラブ」で汗を流していたが、翌年に千葉国体を控え、今度は「県代表に」と声が掛けられた。「本当に迷いました。東京選抜の間とは『次はモスクワだ』と言い合っていましたし。最終的に国体を選んだのは、東京代表としてではなく千葉代表として地元で戦える、との思いが強かったからです」

大観衆の中で開幕した昭和48年千葉・若潮国体。念願のユニフォームを着て、競技会場となった故郷・佐原の地に立った。自身のけがもあり、ベスト16で涙をのんだが、驚くほどすがすがしい気持ちだった。

「胸に輝く『ちば』の2文字は東京とは違った重みがありました。地元の期待を背負っているという自負、県代表として声援を受けられる誇り。それは、わたしにとって今でもかけがえのない記憶です」

編集後記

30年ほど前に「声の広報」の録音を担当していました。当時は広報広聴課の女性職員が読み上げていましたが、BGMを入れたいとの話になり、しかもレコードではなく私が演奏することに。主に童謡を使った記憶があります。最終的にカセットテープに入れ、厚生課の職員が利用者の自宅へ。今では懐かしい思い出です。



成田市役所本庁舎
(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)
はISO14001の認証登録を受けています。

平成21年2月15日号 No.1141

成田市のホームページ <http://www.city.narita.chiba.jp>